

あのNOは理不尽との決別

毎日新聞 2015年5月27日 大阪夕刊

昔の新聞社は理不尽の塊だった。赴任した支局の歓迎会でシャレを飛ばしたら、パイプをくわえたデスクに「半年たって学生気分が抜けなかったら、辞めろ」と冷ややかに言われた。今と違って原稿は鉛筆で書いていて、苦心して書き上げた原稿の束をデスクに出したら、ろくに見もせず「これの何がニュースだ」とゴミ箱に捨てられた。

社会部はもっと理不尽な人ぞろいで、事件キャップは電話で聞こえないような声でボソボソと何ごとかをしゃべり、聞き返すと怒鳴られた。デスクに命じられて原稿の直しを整理部に持って行ったら、整理部のデスクが追っかけてきて「こんな時間にこんな直しを出すとは、どうゆうことや！」と怒鳴られた（それはデスクに言うてくれ、と言いたいが、当のデスクは知らん顔）。その整理部デスクが、介助犬の記事が大きく扱われた日に、介助犬キャンペーンに力を入れていた社会部長に「犬、良かったですね」と声を掛けたら、「犬と違うで」とにらまれた。もちろん犬なんだけど、名前と呼べ、というわけだ。「ヤレヤレ」とため息をつくことばかりが多かった。

「理を尽くさず」と書いて、理不尽。辞書には「道理を尽くさないこと、道理に合わないこと」とある。17日夜、大阪市の住民投票にやきもきしながら一杯やっていて、結果を聞いてすぐに頭に浮かんだのが、この言葉だった。橋下徹市長の手法は、説明を尽くさず、反対派には攻撃あるのみ。「何かを変えてくれる」というイメージばかりが先行し（イメージばかりを増幅させ）、やっていることはコストカットばかり（何かを生み出したのか）。そうしたもろもろの理不尽への「否」だったのではなかろうか。どこぞのキャスターが言うような、変化を嫌う年寄りが変化を望む若者を押さえつけた、というのとは違うと思う。

市長本人は「ぼくみたいな敵をつくる政治家が長くやるなんて害悪」と政界引退を表明した。理不尽を承知の7年余りだったわけか。この先、誰が大阪を担うかわからないが、もう「理不尽」は、「ヤレヤレ」だ。